



海外交流

## Cell Culture Engineering VIIに参加して

吉川 智 啓\*

Attend a international conference : Cell Culture Engineering VII  
 Key Words : International conference, Cell Culture Engineering, ACS, JAACT

### 1. はじめに

この度、生産技術振興協会の海外交流助成金をいただき、自身3度目となる国際学会(Cell Culture Engineering VII(Feb.5-10, 2000, Santa Fe NM))に参加いたしました。これまでに私は、Cell Culture Engineering VI(Feb. 1998, San Diego CA), 216<sup>th</sup> American Chemical Society(ACS, <http://www.acs.org/>) National meeting (Aug. 1998, Boston MA)に参加し、私が興味を持ち、研究を行っている動物細胞工学分野における質の高い発表に触れてきました。今回は、2度目となるCell Culture Engineeringに参加し、博士後期課程での研究成果の総括を発表して参りました。本稿では、国際学会に参加して経験したこと、実感したことについて書かせていただきたいと思います。

### 2. 開催地について

国際学会参加は、様々な場所で開催されるため、いつもと違った感覚を得られる絶好の機会だったと思います。今回参加したCell Culture Engineering VIIは、New Mexico州Santa Feで開催されました。飛行機を乗り継ぎ約17時間あまりの旅の後、到着したSanta Feは、先住民であるインディアンの影響を色濃く受けており、町並みはメキシコ風の建物で統一されている静かな感じの町でした(写真1)。また気候は、私の住んでいる大阪と同じかそれよりも



写真 1

少し暖かい感じで非常に過ごしやすく感じる事が出来ました。ただし、高地であったため(1500m以上)、普段に比べて息が切れることが多かったです。

### 3. Cell Culture Engineeringについて

Cell Culture Engineering(<http://www.engfnd.org/2ac.html>)は、日本における日本動物細胞工学会(JAACT, <http://www.agr.kyushu-u.ac.jp/jaact/jpn/index.html>), ヨーロッパにおける欧州動物細胞工学会(ESACT, <http://www.esact.org/>)にあたります。また、参加者はアメリカのみならず、世界各国の動物細胞工学を研究している約300名の研究者が一堂に会したというものでした。ただ、時期的な問題からか、日本からの参加者は私を含め3名のみでした。さらに、本学会は2年に一度の開催と言うことで、前回参加した時に会った人たちに久しぶりに会えるよい機会となり、かつ論文などでは名前を知らなかった先生方とお会いし、話できるよいでもありました。

### 4. 発表内容について

学会は、大きく分けて、オーラルセッション、ポスターセッション、ワークショップの3つに分類さ

\*Tomohiro YOSHIKAWA  
 1973年3月13日生  
 大阪大学大学院工学研究科・応用生物工学専攻・博士後期課程修了  
 現在、大阪大学・生物工学国際交流センター・研究機関 研究員(2001年3月末まで)、博士(工学)、動物細胞工学・生物化学工学  
 TEL 06-6879-7437  
 FAX 06-6879-7439  
 E-Mail tom7@bce.bio.eng.osaka-u.ac.jp



れていた。それぞれのセッションには個別の時間が設定されており、1つのセッションが行われているときには、基本的にそのセッションに参加者全員が参加すると行った形式でした。また、今回行われた学会でのトピックとしては、

- 1) Virus and Vector Production in Cell Culture for Vaccines and Gene Therapy
- 2) Cell Physiology and Metabolism
- 3) Cell Production of Cell and Gene Therapies
- 4) Protein Quality/Glycosylation
- 5) Cell and Metabolic Engineering
- 6) High Throughput Gene Expression
- 7) Genomics and Proteomics
- 8) Manufacturing Issues

などのものがあり、現在動物細胞工学において注目されているほぼ全ての分野が網羅されていました。発表形態としては、口頭発表で1件30分程度、ポスター発表では、2日間にわけ、各2時間ずつの発表時間を割いて行われました。口頭発表の時には、すべての人が発表を聞き、ポスター発表の時には口頭発表はなく、ポスターの前で討論を交わしており、ポスター発表で参加した私にとっても、非常によい経験となりました(写真2)。

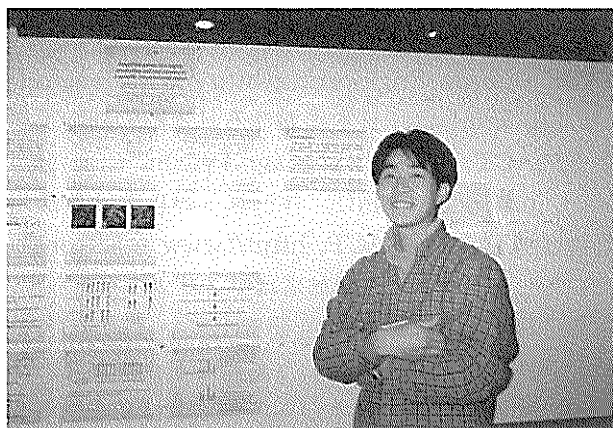


写真 2

この学会に参加してみて気づいたことがいくつかありましたので紹介したいと思います。

#### 1) 発表内容について

口頭、ポスター発表を問わず、日本ではあまり見かけない企業の方の発表が多いことに驚きました。工学関連の学会であるために発表内容の違いはあるにせよ、このような発表は全体の半分以上に及びま

す。特許によってその内容を押さえているとはいえ、内容的にも新しい結果をおしげもなく発表していることには、さらに驚きました。考え方やシステムが異なるために直接比較することが出来ないかもしれませんが、日本における学会ともしっかりとした違いであると感じました。

#### 2) 参加者について

参加者の面々を見ていると、日本人の参加者が少ないということでした。決して、動物細胞工学分野が日本では、活発でないということはないはずですが、事実、先ほども述べたように日本からの参加者は私を含めて3名でした。前回の Cell Culture Engineering VIでも4名でした。これは、開催される時期が日本における年度末と重なるためと言うことも原因であるのでしょう。一方、ヨーロッパからの参加者は非常に多く、日本人参加者は非常に肩身の狭いものでした。

#### 3) その他について

日本からの博士課程の参加は、私一人だったので一概に言うことが出来ないと思うのですが、海外の博士課程の学生の積極さは驚くべきものでした。印象としては、自分の研究というものに対して高いアイデンティティをもっており、かつ、他の研究者の行っている研究に対して自分なりの意見を堂々と述べるという感じでした。ともすれば、自分の発表にかかりきりになりがちなのですが、海外の学生はそれ以外に研究者としての自分を強烈にアピールしているようでした。参加者などと話してみると、一様に日本人の発表者はシャイであるとの印象だそうです。確かに、英語というハンディがあるにしてもこのような違いには、非常に驚かされ、また、これからの自分に必要なことであることを強烈に認識させられました。

## 5. おわりに

最後に、このような海外における発表が、自分の業績報告にとどまらず、これからの自分の研究活動やスタンスにとって非常に役に立つものでした。私は幸いにも、このような良い経験をする機会を得ることが出来、本当に良かったと思います。今回は、国際学会の参加という特殊な形でしたが、私のように若い研究者の卵が、日頃経験し得ないことを体験できる場が増え、またそういった場所に出ていく学生の数が増えていくことを切に願っています。